福島の児童文学者 12

『島田　忠夫』

島田　忠夫、大正から昭和にかけて金子みすゞらと共に活躍し、現在最も広く世に知られている童謡詞華集『日本童謡集』（与田準一編　岩波書店刊）に、「田螺（一・二）」、「鹿」、「巣」の四作品が掲載されている童謡詩人。島木赤彦に師事したアララギ派の歌人でもあり、俳草画でもすぐれた天性をもち、明治の歌人「天田愚庵（あまだ　ぐあん）」の研究家でもあった。

島田　忠夫（しまだ　ただお）、明治三十七年六月十一日、島田定吉・ゲンの長男として、水戸市に生まれる。後に福島県平町（現在いわき市）に移り、四歳から十五歳までを過ごす。小学校卒業後上京し、攻玉舎工業学校を経て鉄道省に勤める。

童謡詩人としての忠夫

忠夫と童謡との出会いは、島木赤彦が雑誌『童話』（コドモ社刊）の童謡欄を担当するようになったことに始まる。大正十一年六月号の『童話』に、選者西条八十により推薦された「田螺」により、童謡界に華麗に登場する。

田螺㈠

田螺が嫁入り　するとウヨ
ころりころりと　嫁入りの
田螺の行列　ゆくとウヨ
目高の川から　山の田へ
十日も廿日も　かかって
田螺が嫁入り　するとウヨ

動作の純い田螺をからかう善意の笑いを表現した作品であり、「するとウヨ」「ゆくとウヨ」と歌う、間延びした繰り返し（畳句）が、春の日のけだるさを伝えている。その他にも、推薦三十編、入選二十四編を数え、金子みすゞ・佐藤義美と共に『童話』の生んだ代表的な童謡詩人と言われた。しかし、忠夫の作品は児童の生活を丹念に描き、児童の感動を内面から押し出す姿勢に欠けていた。

大正十五年七月号を最後に『童話』が廃刊になり、発表の場を失った彼は、佐藤義美や与田準一のように雑誌『赤い鳥』に転じて北原白秋と共に活動しなかったため、童謡詩人として広く世の中の読者を得られなかったが、童謡や短歌・俳句・随筆等はその後も書き続け、『童謡詩人』・紫式部学会機関誌『むらさき』・「信濃毎日新聞」等に寄稿していた。

このような中で、忠夫の作品集が出版され、昭和三年六月寺田寅彦氏の推薦で岩波書店から童謡詩『柴木集』が、昭和十八年には、童謡詩『田園手帖』が昭林堂書店から出された。

画家としての忠夫

大正十五年に雑誌『童話』の廃刊と恩師島木赤彦の死に合い、忠夫の関心は童謡より絵画の方に向けられた。

幼い時より絵の才能に恵まれ、二十歳で金沢重治に、以後萬鉄五郎・森田恒友・小川芋銭に師事し、洋画・日本画を修め、後に俳草画に目覚め雅号を双魚（そうぎょ）と付け一途専念する。俳草画とは、俳句や俳諧の連想を略画にしたものである。やがて作品も揃い、昭和十二年に銀座鳩居堂で個展を開いて成功を収め、以後昭和十九年までつづけられ、同年には、想像を絶する出版事情のなか、俳草画の手引き書として『俳草画小径』を、冨山房から出版している。

忠夫といわき市

忠夫は、四歳から十五歳（明治四十年から大正七年）まで平町（現いわき市）鷹匠町で過ごし、尋常・高等小学校に通い、絵の上手い少年として全校に知られていた。卒業後は、中学には進まず上京している。

その後昭和四年暮れに平町に戻り、昭和八年まで弥宜町に住み、小名浜の白井漁場で漁師をしたり、「いはらき」新聞に寄稿したり、時折水戸の女学校で良寛や児童文学の授業を行った。

平に住んでいた十四歳の時に島木赤彦のアララギの会員となり、短歌を詠んでいた。当時の作品

つくつくし　長く短く　生る野に
ふたたび人は　かえることなし

このような短歌好きの少年にとって、平出身の幕末・明治の放浪歌人天田愚庵への興味は大変なものがあったようで、大人になっても研究を続け、詩歌・戯文集「戊寅口占」（愚庵が清水の次郎長のもとに寄食していた当時の作品）や、「愚庵和尚年譜」の作成、「愚庵父母妹の最後に関する調査」等を、『アララギ』・『短歌春秋』等に発表し、それらをまとめ、昭和十年に立命館大学出版部に出版の交渉をしている。

平の町と芸術をこよなく愛した忠夫も、昭和二十年八月七日、終戦の報も聞かずに他界した。享年四十二歳であった。戦争の最中においても、泰然と学芸に身を委ねていた、素晴らしい芸術家であった。

参考文献

- 平林武雄「童謡詩人島田忠夫　一～五」（『童話』一九八六・四～八）
- 詩季（詩季の会　編・発行）
- 『天田愚庵の世界』（中紫光泰・斎藤卓児　編著）